社畜のおもちゃ箱

社畜のきなこ餅

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＴＳ小ネタや、ＴＳじゃない小ネタを雑多に放り込んだ短編置き場です。

怪文書注意ですが、それでもよろしければお付き合い下さい。

希望が多ければ、今抱えてる連載の傍ら不定期更新に抜擢されるかもしれません。

目　次

原作：ダイの大冒険（ＳＫＹＲＩＭクロス）
（ＴＳ）ドヴァキンさんの子育て日誌　1
（ＴＳ）ドヴァキンさんの誘拐日誌　19
（ＴＳ）ドヴァキンさんの教育日誌　30
（ＴＳ）ドヴァキンさんの修行日誌　40
（ＴＳ）ドヴァキンさんの鍛造日誌　49

原作：ダイの大冒険（ＳＫＹＲＩＭクロス）（ＴＳ）ドヴァキンさんの子育て日誌

デルムリン島　初日

ここに、自分が居た証として日誌を遺す事にする。

自分は意識を失ったまま、この島（後日出会った変わった風体の第一村人曰くデルムリン島と言うらしい）に流れ着いた。

大量生産消費社会によって汚染された海とは似ても似つかない、透き通るような海に白い宝石のような浜辺が自分が意識を取り戻した場所だった。

そこでまず自分は、最初の異常事態に気が付いた。

この場所は自分が居た場所とは明らかに違うという確信はあったのだが、比較する為の情景が頭の中で霞がかったかのように思い出せないのである。

かろうじて、虫食いのフィルムを覗き見るかのように『自分』という存在が居た場所の記憶を思い出せるが、自分が何という名前だったかすら出てこない有様だった。

しかし、この時の自分は混乱しつつも、濡れたままでは良くないと立ち上がり耳と尻

尾をパタパタと動かして水気を払ったのだが、そこで新たな疑問が出た。
少なくとも『自分』は人間だったはずで、頭の上から耳が出て居たり臀部からフサフサの尻尾が出て居たりはしていなかった筈なのだ、しかし実際そこにはあるのである。
そこで視点が自分が思っている以上に低い事に気づき、体の違和感から自らの体を見下ろしてみれば、ビキニ状の鎧で先端を隠されている……視界の大半を埋める大きくて柔らかな二つの塊が見える始末だから大変だ。
そうだ、自分は確か、スカイリムの大地で幾つもの冒険を重ねた末に、ソブンガルデにてアルドゥインと決着をつけた筈だという思考が頭をよぎる。
突拍子もない内容であったが、虫食いの記憶以上にその思考はストンと自分の中に定着し、それが呼び水となって様々な記憶が頭に蘇ってきた。
自分は、自宅のパソコンの前でＰＣゲームのＳＫＹＲＩＭを遊んでおり、長くほったらかしにしていたメインストーリーをようやく終わらせた所で一度意識を失ったのである。
そして、自分の体の違和感や視点の低さから嫌な予感を感じながら、透き通るような海面で自らの顔と姿を確認したところ。
目の前には、頭から狐のような大きな耳を生やしたあどけない顔立ちの、しかし胸が非常に大きい俗にいう美少女が映っていたのだ。

本来ＳＫＹＲＩＭというゲームは硬派なゲームで、俗にいう美少女やロマンスと言った要素はごく一部を除けば殆ど無いゲームなのだが……。

自分は欲望の赴くままにＭＯＤと呼ばれる自作パッチを大量に当てていた。

本来は存在しない美少女種族を追加するＭＯＤにプレイ上の利便性を向上させるＭＯＤや装備を追加するＭＯＤ、果てはゴニョゴニョな事が出来るＭＯＤまでを入れていた。

そのままでは正常に起動しない事に腹を立てながら、平日だというのに深夜まで時間をかけて自作のＭＯＤでトラブルを解決した記憶も、自分の中にあるぐらいだ。

思わずふら付きながら、痴女めいた格好を何とかしようと、背中に背負っていた小さなカバンを地面におろし。

底が見えないカバンに手を突き入れれば、まるでアイテムの一覧のような内容物が表示され、自分は特に意識することなくローブを引っ張り出して羽織る。

この時に、カバンの異常性に気付き、もう一度手を突っ込んでみれば大量のアイテムがずらりと並んでいるのだから驚きだ。

今思えば、カバンの中身は実プレイ中にストレージへしまい込んでいたアイテムや、自宅に保管していたアイテムだったのだろう。

本来は身動きが取れなくなるどころの騒ぎじゃない内容物の量だったが、取り出すま

では重量は感じないらしい。理屈がわからなくて気味が悪いが今ばかりは有難いものだ。

幸い食料品や飲み物、回復用ポーションまでと至れり尽くせりの内容物だったので、すぐに餓死したりする事もないだろう。

せめて、人間がいると有難いのだがなどと思いながら、自分はカバンを背負い直して幾つもの視線を感じる密林へと足を踏み込んだ。

デルムリン島　２日目

結論から先に言えば、この島には自分以外の人間的な生物は存在しないらしい。

狐耳と尻尾が生えた小柄な少女、胸だけ極端に大きいエリーンと化してる自分を人間としてカウントするのか甚だ疑問ではあるが。

昨日、密林へ入った自分は程なくして綺麗な水が流れている沢を発見し、沢の流れに沿うように密林の中を歩いていたのだが、そこで密林の中から自分へ声をかけられた。

腰に下げておいた黒檀の剣の柄に手をかけつつ、声がした方へ振り向いてみれば、視線の先で茂みがかき分けられて声をかけてきた人物?が現れる。

その人物の外見は、というより造形と言うべきか、それは何とも奇怪なデザインで。失礼を承知で言うならば、寸詰まりのあざらしに人のような手足がついており、胴体部に大きな顔がついていたのだ。

ブラスと名乗ったその人物は、手に持った杖を構えつつも俺に何者かと問いかけてきたのだが、ここで重大な問題が発生。

自分は言葉を発する事が出来なかったのだ、否、正確に言えば音を発する事は出来るのだが意味のある言語を話そうとすると、自動的にドラゴンシャウトが口から出そうになったのである。

ＳＫＹＲＩＭの物語に大きく関わるソレは、常命の者と不死であるドラゴンを区切る一つの大きな境界線であり、ゲーム中で冒険や激闘によって習得していくモノで相応に強力な存在だ。

そんなものがぽろっと飛び出すようになったこの体では、どのようにコミュニケーションをとるべきかと自分は悩み、悩んだ末に。

ボディランゲージとジェスチャーで意思疎通を図る事にした、幸いにもブラス氏は理性的かつ理知的な人物だったので多少誤解はあれども自分がどういう存在かを説明できたと思う。

ブラス氏が自分を見る目に、同情があるがそれもしょうがないだろう、言葉を交わせ

ないのがここまで不便だとは自分も思っていなかったのだから。

デルムリン島　１０日目

最近サボり気味であったが、家が出来た記念に日記を書くことにする。
２日目のあの後ブラス氏に彼が住む、ジャガイモを半分に切り中をくり抜いたかのような住居へ案内されたのだが……。
ブラス氏にとっては住めば都でも、こちらにとっては少々住み辛かったのだ。
その為、島の顔役でもあるらしいブラス氏の許可の下、彼が住む洞窟付近にある開けた場所の樹木を黒檀の両手斧で伐採し、スペースと建築用の木材を確保していったのである。
時折気分転換に、錬金術の素材に使えそうな薬草や花を食んだのち採取しつつ。
ブラス氏の洞窟に設置させてもらった寝袋で朝目を覚まし、近くの沢で沐浴をしてから、カバンの中に入ったまま腐る気配のない食材で朝食をブラス氏と摂り。
その後は日が暮れるまで伐採と建築に当たり、日が沈んできたらブラス氏と夕食を取り、沢で汗を流してから就寝。この繰り返しの果てにようやく家が建ったのである。

これもきっと、入れていた建築ＭＯＤの賜物であろう、入れてなかったらどうなるものかと思ったが、考えても詮無き事なので考えないようにする。
それと最近は沐浴の度に露わになる自分の裸体にも慣れてきた、慣れるというのも変な話であるし、考えるにどうも自分の元の性別は男性だったはずなのだ。
だからこそ、雄を誘い興奮させるアンバランスな体を洗う度に言いようもない、羞恥の感情に襲われたものだ。
それなりに慣れてきている現状、その内考えないようになるだろうけども、その時自分の意識はどうなるのだろうか？

デルムリン島　２０日目

本格的に家の建築が完了し、内装や家具も一通り整える事が出来た。
ホワイトランの自宅にあったであろう机や椅子、それにベッドがカバンの中にあったのは僥倖だったと言える。
この日は、カバンに入れたままのＳＫＹＲＩＭ名物とも言えるハチミツ酒を取り出し、ブラス氏と酒盛りを開く。

途中から島に住むモンスター達が我も我もと参加してきた事で、ハチミツ酒の大半が飲みつくされてしまった。

だが悪くない気分だ、ブラス氏とだけ交流をしていた自分だが、これを機にモンスター達とも仲良くなれた事も幸運と言える。

追記

ブラス氏が自分に名前を付けてくれた、スカイと言う名前らしい。

名前の由来は、透き通る青空のような髪の毛と耳尻尾の色からしい、良い名前だと思うのでぺこりと頭を下げてお礼をする。

デルムリン島　４０日目

最近は沐浴の旅に乳房の下側や恥部を洗うのにも特に羞恥心を感じなくなってきた、これが慣れだろうか。

その時に改めて気付いたのだが、強く乳房を圧迫すると先端から僅かに白くて甘い臭いを放つ液体が滲み出る事に気付き。

ソレと同時に、この体の持ち主と言えるキャラクターでごによごによな事をしては、

その結果を何回か結実させた事も思い出した。
こうなると判っていたら、その手の事をやったり結果が結実するＭＯＤを外してプレイしたものだが、今こうなっている以上悩んでも意味がないので忘れる事にする。

デルムリン島　６０日目

自分がデルムリン島に流れ着き珍しい嵐の日であった。
早い段階で家を建てれて良かったとホッとしつつ家の中で、デルムリン島由来の素材で錬金術に勤しんでいたのだが、ふと何か胸騒ぎをその日覚えた。
ついでに顔なじみになった魔物の様子を見つつ、島をぐるりと見てこんな日じゃないと採取できない素材があるかもしれない、などと思いつつ自分はローブを羽織って家を出たのだが。
結果から言えば、島の浜辺に一隻の小舟が漂着しており、微かに聞こえる泣き声を頼りに船を調べると、中には産着にくるまれたままの衰弱した赤子が一人いた。
このままでは赤子の命に関わると自分は判断し、雨合羽代わりに着込んできたローブの内側に赤子をいれて優しく抱き抱えると、急いで家へと戻る。

途中ブラス氏も胸騒ぎがして見に来たのか鉢合わせたので、赤子を見せて状況をジェスチャーで伝え、共に自分の家へと向かう。
嵐による雨で赤子の体力はかなり弱まっていそうだが、何とか頑張ってもらいたい。

デルムリン島　６１日目

昨日保護した赤子は、幸いにも峠を越えたようで今も自分の腕の中で気持ちよさそうに眠っている。
微かにドラゴンボーンとしての自分が、赤子に何かを感じているがきっと気のせいであろう。
赤子が峠を越したことにほっとしたブラス氏は、同様に自分が保護した赤子が気になって仕方ないのか集まってきていたモンスターへ説明すると話し、席を外し……そのタイミングで赤子が目を覚まし。
中々に大きな声で泣き叫び始めた、おしめが濡れているのかと思えばそんな事も無いので途方にくれる自分だが、母性本能とも言える何かに自分の体は半自動的に動き始め。

胸元をはだけると、泣き叫ぶ赤子の口元へ乳房を近づけていた、そしてすぐに赤子は自分の乳房に吸い付き母乳を啜り始めた事からどうやらお腹が空いていたらしい。
じんわりと、何かが自分の中で満たされる暖かい気持ちを感じる、コレが母性だろうか。

デルムリン島　６２日目

ブラス氏が、赤子が載せられていた船に何かの刻印が刻まれていたと話しに来た、なお赤子は今も自分の腕の中で寝ぼけ眼でウトウトとしている。
つい先ほどミルクを与えたばかりなので、お腹いっぱいで眠くなってきたのだろう。
話を戻すと、刻印の大半は削れて見えなくなっていたが、Ｄの文字だけ微かに読み取れたらしい。
ブラス氏曰く、恐らくだが赤子の名前だろうと離してくれる、そうなればその文字にちなんだ名前を付けて上げたい所だが、いかんせん自分の口は言語を形にするとシャウトが飛び出るから致命的に向いていない。
赤子を抱える腕を揺らし、鼻歌で子守歌を歌いながら赤子をあやしてる中、何かを閃

いたブラス氏が俺がカバンからまとめて出して置いてある紙に何かを書き始め。
赤子をダイと命名した、どうやらブラス氏も自分と同じようにかろうじて読み取れた文字にちなんだ名前を付けて上げたいと思っていたらしい。
声に出して呼んであげる事は出来ないが、唇だけでダイと呼んであげれば、寝ぼけ眼な中にダイは嬉しそうに笑い声を上げた。
自分と言う存在が母性本能に上書きされ塗りつぶされていく錯覚を感じるも、悪い感覚でななかった。

デルムリン島　1年半目

ブラス氏にダイの面倒を見てもらっている間、食事の準備を進めているとブラス氏が大声で自分を呼んだので急いで駆け付けたところ。
ダイが足を震わせながら、椅子に捕まり立ちをしていた。急いで記録装置を探すがそもそもカメラもビデオカメラも無い事を思い出し、ダイの雄姿を目に焼き付ける。

デルムリン島　2年目

ダイがとうとう言葉を喋り始めた、初めての言葉はじーちゃだった事で少し落ち込む。

ブラス氏は嬉しそうにしつつも、喋れないのだから母親の類の単語を知らないのだろうと慰めてくれた。

気を取り直しつつ、オシメが濡れて気持ち悪いのか大声で泣くダイの下へ向かう。

正直思った以上に赤子の世話は大変であるが、不思議と自分の心は充実していた。

デルムリン島　3年目

年月が過ぎ去るのは本当に早いもので、自分がデルムリン島に流れ着いて3年目に突入していた。

流れ着いた当初は自分が女になっていたことに狼狽したものだが、そうだったからこそダイを育てられると思うと今では良かったとも言える。

最近はダイもちょこちょこと歩き始めるようになり、自分やブラス氏の後ろをついて回ったり、人懐っこいモンスターにあやされてきゃっきゃっと嬉しそうにはしゃいでる

姿を良く見る。
はしゃぎすぎてたまに危険な遊びをするモンスターもいるが、そういうのはしっかりと叱りつけるから問題もないから安心だ。

デルムリン島　５年目

ある日ダイが、不思議なモンスターを家に連れ帰ってきた。
そのモンスターは島にいるスライムと呼ばれるモンスターにそっくりだったが、黄金色に輝き翼を生やしたそのモンスターは今まで見た事がない固体だった。
まぁこの島には、どうやってその巨体を維持してるのか疑問を感じるモンスターや不思議な形状のモンスターも数多くいる事だし、きっと突然変異なのだろう。
ダイが一緒に暮らして良いかと聞いてきたので、微笑んで頷いてあげると嬉しそうに羽の生えた金色スライムとはしゃぎ始めた。
名前も決めてあるらしい、ゴメちゃんという名前だとか。

デルムリン島　6年目

そろそろダイもしっかりしてきたが、それでもまだまだ子供だと感じるところは多い。

育児の合間に作ったお風呂に中々入りたがらないが、一緒に入るとおとなしく体を洗わせてくれるし、錬金術の勉強やブラス氏の呪文の勉強から逃げ回るが、最後には帰ってきてさぼったことを素直に謝ってくれる。

男の子は多少ヤンチャなくらいでちょうど良いのだ、ブラス氏曰く自分は甘やかし過ぎじゃないかという指摘もあるが、気のせいだろう。

デルムリン島　7年目

ブラス氏の蔵書の中から見つけた冒険物語に最近ダイが夢中だ、ちなみにこの世界の文字は自分も勉強中なのでもっぱらダイと一緒に授業を受ける身分である。

自分と一緒の授業だとダイが真面目に受ける事にブラス氏は嘆息しているが、きっと授業参観みたいな感じでダイは緊張しているだけだと思われる。

閑話休題、その冒険物語なのだが、特にその中にある記述の勇者というものにどうや

らダイは夢中なようで、羊のようなモンスターに跨って木剣を片手に島中を走り回って遊ぶ日々だ。

最初は木の枝を振り回して遊んでいたのだが、重心が安定せず寸法のまちまちなそんなモノでダイに変な癖がつくのは我慢できなかったので、家から離れた秘密の場所に作った鍛冶場でダイの為に手作りした木剣を渡している。

やっぱり過保護で甘やかし過ぎだと、ブラス氏から正座でお説教を受けた、だが鋼鉄の剣をいきなり渡さなかっただけ褒めてほしいとジェスチャーで訴えたところ。

ダイが帰ってくるまで正座でお説教を受ける事となった。

デルムリン島　８年目

一緒にお風呂に入ってる際、ダイが何やら悩んでいたので聞いてみたところ。

何でこの島には母ちゃんと自分しか人間が居ないのか、と聞かれる。

正直自分もわかってないので、誤魔化し笑いを浮かべてダイの頭を撫でて誤魔化したところ、無事はぐらかす事に成功した。

デルムリン島　１０年目

最近、ダイが一緒に寝てくれなくなったことをブラス氏にジェスチャーで訴えたところ、呆れたように溜息を吐かれた。
そもそも、男子がここ最近まで母親と一緒に寝る事の方が珍しいらしい、何と言う事だ。
そう言えば最近はお風呂も一人できちんと入るようになったし、どうやらダイはしっかりと成長しているらしい。
少し前まで赤子だったように思える自分としては、少し寂しい限りである。

デルムリン島　１１年目

その日も家で料理をしていたところ、ダイが息せき切って家へ飛び込んできた。
興奮のあまりいまいち何を言いたいか理解できなかったが、どうやら勇者達がこの島にやってきたらしい。

こんな平和な島に、一体何をしにきたのだろうかなどと考える自分を他所に、勇者様とお話してくるとダイは叫ぶや否や風のように駆け出して行った。

何時までたってもやんちゃ坊主だと思うが、男の子はそれぐらいで良いのであると思ったものの、その時自分は妙な確信とも言える胸騒ぎを感じていた。

何事もなければよいと願いつつ、家の裏手に置いたままの黒檀の両手斧を肩に担ぎつつ、自分はダイを追いかける事にした。

今思えば、これがダイがこれから繰り広げる大冒険の序曲だったのだろう。

（TS）ドヴァキンさんの誘拐日誌

船の中　初日

ここに、自分が捕獲された証として日誌を遺す。

結論から言えば、自分はゴメちゃんと共に勇者でろりん一行とやらに捕獲され、今は船倉の檻の中にいる。

遡る事半日ぐらいであろうか、ダイが飛び出して行った後妙な胸騒ぎを覚えて、家の裏手に放置したままの黒檀の両手斧を手に取った頃滅多な事では使わない筈の全員集合の笛の音が鳴った。

その音が気になったであろうブラス氏と共に、音が鳴る方向へ揺れる胸に難儀しつつ小走り気味に向かったところ、この島では一度も見たことがない一行が魔物に囲まれて佇んでいた。

それぞれの役割に特化したかのような衣装を纏った一団に首を傾げていると、ブラス氏が勇者と口にするも何かの違和感から杖を向けて誰何の声を上げ……。

ブラス氏の言葉に鬱陶しそうにこちらを睨んだ、一団のボスらしき男（後にでろりんという名だと判明、もしかしてこの名前のせいで彼はグレたのではないだろうか）の合図とともに、集まった魔物達へ一団が襲い掛かる。

この島に住まう魔物達は、野生をどこかへ置き去りにしたかのような陽気で平和的故か、反撃もままならず蹴散らされていく状況に、ブラス氏が怒りと共に呪文を唱え自分もソレを援護すべく斧を構えて吶喊した、のだが。

黒檀の両手斧で、ゴリラのような顔をした戦士を平打ちで弾き飛ばしたまでは良かったが、自分を脅威と判断したのか一団からの集中砲火が自分へと殺到し。

ローブや衣服を刻まれ、素肌を露出させられながらイオラとかいう呪文で吹き飛ばされてしまう。正直な所シャウトを使うべき状況であったが、何がどう作用するか判断できず二の足を踏んでしまった自分のミスであった。

そして爆風で自分が転がされたところで、ゴメちゃんを抱えたダイが戻ってきたのだが。

自分とブラス氏、そして友達である魔物達を傷つけられた惨状に、ダイは怒りの叫び声を上げながら敵の一団へ立ち向かうがバギの呪文で吹き飛ばされ。

抵抗空しくゴメちゃんを、ずるぽんという僧衣姿の女性に奪われてしまい、自分もへろへろとかいう戦士に担がれてしまった。

典型的な魔法使いと言える恰好をした老人が、自分も攫おうとする事に異議を唱えたが、どうやら自分みたいな姿形の種族は珍しいらしく献上品にされるらしい。何と言う事だ。

コレが自分とゴメちゃんが拉致された経緯である。

何故か彼らの船の中にあった檻へ放り込まれた自分であるが、女性として同情されたのか傷塗れの体はずるぽんに治療され、まぞっほからはボロ布と化したローブの代わりと彼の着替えらしいローブを借り受ける事が出来た。

黒檀の両手斧はへろへろとやらに強奪されてしまったが、まぁインゴットはいくらでもあるし幾らでも作れるから良しとしよう。

しかし、エピックでもレジェンダリ等級でもない素の黒檀の両手斧であそこまではしゃげるというのは、彼らは彼らなりに装備で苦労しているのかもしれない。

船の中　二日目

今日も今日とて檻の中である、暇でしょうがないが手元にあるのは日記調代わりの手

帳ぐらいしかないから困ったモノである。
ブラス氏とダイが元気ならよいのだが、とりあえず今現状で脱走して船を奪っても、意志疎通が困難なこの体ではデルムリン島へ戻る事は絶望的としか言いようがない。
故にこそ、彼らの目的地に着いた瞬間何としてでもゴメちゃんを奪取し、そのままデルムリン島へ帰らねばならない。
だがそうは言ったものの、やりようがない。故に暇であるという最初の問題へ戻ってきてしまう。
どうしたものかと、指先で尻尾の毛並みを整えていた自分であったが、足音が近づいてきたのでそちらを見てみると、勇者もどきことでろりんがやって来た。
彼が言うには、自分が使っていた斧は誰が作ったものだという話だった、とりあえず自分を指さしたら嘘をつけと叫ばれるも真実だからどうしようもない。
ついでに自分が言葉を発してない事に気付いたのか、言葉を喋れないのかと聞かれたので頷いておくと、気まずくなるでろりん。
やはり、酷い名前のせいでグレているだけで、彼の性根は言うほど曲がっていないのではないだろうか？
ともあれ、しばらく見つめ合う自分とでろりんであったが、檻の隙間から刃こぼれした鋼鉄の片手斧が檻の中へ放り込まれ、更に武具の手入れ用品まで放り込まれた。

なんでも本当にあの斧を作ったのならこの斧をマシな状態にしてみろ、らしい。正直精錬設備も鍛冶場もない現状に無茶を言うものだが、暇だし何とかして見る事にしよう。

船の中　三日目

出来る限りの事はやれたであろう、暇だったとはいえ少々没入しすぎたかもしれない。

ついでに、暇だったので握り部分へ細工まで施した自信作だ、設備の関係で上級程度にしか仕上げられなかったのが心残りなので今度リベンジをしたいところである。

なお、仕上がった鋼鉄の片手斧にでろりん達は息を呑んでいた、その程度で驚かれても正直恥ずかしいとしか言いようがない。

まぞっほが、まさか妖精の鍛冶師とか呟いていたのだが、自分の今の体であるエリーンは妖精の一種なのであながち間違いじゃないのかもしれない。

思わぬ拾い物だとでろりんが高笑いをしているが、捕らぬ狸の何とやらではないだろうか。自分は狐であるが。

ロモス王国　初日

色々とあったが、無事船はロモス王国とやらの港へ着き、自分が入ったままの檻もまた降ろされた。

しかし、まるで見世物のように荷台が丸見えの馬車で運ばれるのは少々恥ずかしいモノがある、見物人の男達の目が自分の胸元へ集まっているのまで丸分かりだ。

男のチラ見は女のガン見とはよく言ったものだと思うが、ここまでガン見されると視線が矢のように突き刺さっている錯覚まで感じる始末である。

最悪、シャウトを使って脱走を考えていたがコレではそうもいかないし、ゴメちゃんが入った檻はでろりんが抱えている以上やりようがない。

よって、自分はこのまま城へ運ばれていく事となったわけだが……。

演出とやらで、ゴメちゃんを抱えた状態で献上された。

周囲は完全装備の衛兵に囲まれているので、シャウトで吹き飛ばして逃走も少々面倒そうである、さすがに子供がいるのに賞金首になるわけにもいかない。

そのまま、何やら着替えさせられた挙句また檻の中へ戻されたのだが、玉座のすぐそこに設置された状態で集まった見物人の視線が大集合の有様だ。

どうしたものかと、ふわふわのドレス姿のまま腕を組んで考えていたところ、ダイが何か叫ぶような声と共にパーティ会場に魔物が出現。

煌びやかな会場が一転して、てんやわんやの大騒ぎの様相を呈してきた。

正直好機にもほどがあるので、ドレスアップさせられていた際にくすねていた針金のような金属で即席のロックピックを拵え、頑丈な割に作りは簡素だった檻の鍵をこじ開ける。

自分の突然の動きに衛兵達は大声を上げるも、胸元に抱いたままのゴメちゃんを手放さず、捕まえようとする衛兵を避けながらダイの姿を探し。

自分が見つけるよりも先に、ダイが母ちゃんと叫びながら自分へ抱き着いてきたので、片腕で抱き留めて無茶をした愛しい息子へ頬擦りを返してあげる事にする。

ダイの話では、有志を募って自分とゴメちゃんの奪還を決行しにきたらしく、キメラ達で脱出しようと叫ぶので頷き、同時に風切り音と共に襲い掛かって来た剣をダイを抱き締めたまま横へ飛んで避ける。

二人してゴロゴロと転がり、ダイとゴメちゃんを自分の胸元へ押し付けるような形になりながら体勢を立て直してみれば、そこに居たのはでろりんとへろへろにまぞっほの

３人衆であった。
へろへろに至っては、自分から強奪したままの黒檀の両手斧を手にした状態である。惜しくはないけど返してほしいものである。

ダイにゴメちゃんを押し付け、手伝いに来てくれた友達の撤収準備をするようジェスチャーで伝えると、ダイを追いかけようとする３人の前に立ちはだかる。
彼らは彼らで嫌いになり切れないし、この城の人間達に隔意があるわけではないのだが、息子と息子の親友の一大事だ。ちょっとぐらいヤンチャをしても許されるだろう。

自分には戦闘の時の詳細を語る才はないので、結果だけ記すとしよう。
へろへろ達めがけ、武装解除のシャウトを全力で叩きつけてへろへろがとり落とした黒檀の両手斧を取り返すと、３人まとめて平打ちして薙ぎ倒した。
その後も、小競り合いじみた戦いと呪文の応酬こそあったが、最終的には揺ぎ無き力でまとめてトシコシダーして沈黙させた。
何人かの衛兵と、不幸にも巻き込まれたロモス王も吹っ飛ばされていたが、ダイとゴメちゃんの安全が最優先なので赦してもらいたい。

ふと見てみれば、スライム達を網袋に入れてダイを恫喝していたらしいずるぼんが、自分が放つシャウトに血相を変えてダイを問い詰めていたモノの、ダイも知らないのだから首を横に振るしかない。

少しばかり頭に血が上って大暴れしてしまったが、ここまで来たら毒を食らわば皿までだ、徹底的に大暴れして追撃がないようにしようと気合を入れたところ。

ダイとゴメちゃんが必死の形相で飛びついてきて、もういいから。大丈夫だから！と自分を押し留めてくる、殺すつもりはなかったのだがどうやらダイ達を心配させてしまったらしい。

結末を述べてしまうとするならば、今回は互いの不幸な行き違いとロモス王の目が曇っていた事が原因と言う事で、ロモス王がダイと自分達へ謝罪する事で決着した。

更に、今回の件でろりんへ授けられる予定だった、覇王の冠という秘宝までもがダイへ渡されるらしい。この王様みたいなのがタムリエルにも居たら、あの情熱大陸も少しは平和だったのだろうか。

問題はその後なのだが、今回の事態を招いたということで気絶していたろりん達がひっとらえられそうになっていたのだが、さすがに気の毒に思えたので庇ってやる事にした。

ダイは納得いってない様子だったが、彼らの目は腐りきって無かったことと、挽回の機会を与えてやってほしいとロモス王へ伝える。ジェスチャーで。

無論上手く伝達いくわけがなかったのだが、途中から溜息と共に通訳してくれたダイによって、無事意思疎通は完了した。

ついでにお詫びとして、さっきまで振り回していた黒檀の両手斧を進呈する事にする。そこそこの示談金になってくれれば何よりだ。

デルムリン島　帰還初日

無事ダイ、ゴメちゃんと共にデルムリン島へ帰ってくることが出来た。

ふわふわのドレスは、似合っているからと言う事でロモス王から進呈されたのだが、正直家事に不向きなので家のクローゼットへ仕舞い愛用していたローブに近いモノを引っ張り出して着直す。

ダイは少し残念そうにしてたが、ああいうのは正直慣れないから着たくないものだ。ソレに今後も着る機会はないだろう。

後日、この考えがスイートロールよりも甘い事を思い知る自分であったが、この時は知る由もなかった。

（ＴＳ）ドヴァキンさんの教育日誌

デルムリン島　帰還３か月目

ロモスに誘拐され、そして帰ってきてから早三カ月が過ぎていた。
帰ってきてからダイは自分に戦い方を教えてほしいと頼んできたが、頭を撫でてやんわりと断る。
自分の戦い方は、体に染み付いた戦い方に体を委ねて暴れ回るモノだ、少なくとも体がまだ出来ていない子供にさせるものじゃない。
まぁ結局、ダイの頼みに根負けして教える事となった。
泣きそうな顔をして見上げられたら自分にはお手上げなのだ、ブラス氏には甘すぎると溜息を吐かれたが。
というわけで、毎朝デルムリン島を二本の足で駆け抜けつつ、道中に自生されていた錬金術の素材を回収しながらダイと一緒にランニングし、木剣で打ち合い。
泉で互いに汗を流したら朝食、その後はお昼までブラス氏の呪文と一般知識のお勉

強、お昼ご飯の後は錬金術のお勉強をして、その後は自由時間にしている。
ちなみに一週間に二日間は、何もしない休日を設けている。毎日頑張ったら疲れてしまうし効率も落ちるからだ。
そんな具合に充実した日々を送っていたのだが、休日に設定している日のある日のことだ。
ブラス氏と、島で自生している薬草を煎じたお茶に、島の蜂型モンスター……さそりばちとやらからお裾分けしてもらった、蜂蜜を混ぜてのんびり啜っていた日の事。
ダイが、大いに慌てて家の扉を勢い良く開き、軍艦が攻めてきたと叫んできた。前の騒動もこんな風に始まった気がするのは気のせいだろうか。
ともあれ、何かあってからでは遅いのも事実なので。
ＭＯＤで追加したっぽい、レオタード状のぴっちりとしたスーツを着用し、その上に島に漂着した時に装備していたビキニアーマーを着けた上で、黒檀のブーツを履き直す。
元々は素肌に着けていたが、これなら少しは痴女度合いもおとなしくなるに違いない。更にその上に、若干動きにくくなるがローブを羽織っておく。
右手には黒檀の片手斧、左手には黒檀の盾を装備。頭には着用できる手頃な防具が無かったのでそのままにしている。

顔が隠れるのを嫌って、ろくに頭部防具は拾ったり作ったりしていなかったツケがまさかこんなところで来るとは思っていなかったというのが、正直な所である。

どちらにせよ、頭に生えてる狐耳の関係でまともな兜は装備出来ない身なので、何かしら考える必要があるかもしれない。

しかし今はそれどころではないので、早く早くと急かすダイに案内されて海がよく見える断崖へ行ってみれば、確かに立派な船があった。

だが、どうも軍艦ではないらしく、ブラス氏曰く賢者にのみ使うことが許可された由緒正しい船らしい、ウィンターホールド大学でアークメイジになったジェイ・ザルゴとかでも乗れるモノなのだろうか。

その後は、船から小舟で接岸してきたパプニカ王国の一団と話し合い、スラリとした体形の活発そうな美しい少女をダイが案内する事となった。

心配だから付いて行こうとしたが、目付きの鋭い長髪の賢者の青年……バロンとやらに、母君様はダイ殿を大事に想われているのですね、と呼び止められた。

そりゃもう当然と、尻尾を振りながら頷くとバロンは、どこか羨ましそうにレオナ姫とじゃれ合っているダイを見詰めた後。

母親がずっと傍に居てはダイ殿の成長の為にはならないかもしれませぬ、と言われ。

思わず自分はショックを受けてしまい、更にダイからも俺一人で大丈夫と言われて二度ショック。

結局ダイに同道する事は叶わなかったので、御付きの偉そうな人。テムジンらと会話を弾ませる、と言っても自分はジェスチャーを返すのみだが。

その際に、自分が身に着けている武具の出所を聞かれたので、自分で作ったものだとジェスチャーで応える。最もコレクション気味にストレージへ放り込んでいたものなので、言うほど強くはない一品だが。

メインで使っていた、ポーションとエンチャントを駆使して作った武器は今もカバンの中である。万が一ダイが触れて何かあってはまずいから厳重封印状態なのだ。

しかし、その時。甲高い鳴き声と共にゴメちゃんが森の奥から飛び出してきた。

自分では理解できないゴメちゃんの言葉を聞いたブラス氏曰く、魔のサソリとやらが出てきてダイとレオナ姫が危機に陥っているらしい。

ふと気づいてみるとバロンの姿が見えないのが気になるが、今はダイ達が最重要だと駆け出したところで、テムジンの側近と思しき男達に槍を突きつけられて足を止めさせられた。

ブラス氏へ視線を送れば、やってしまえと鋭い眼光で許可が下りたので。揺ぎ無き力でトシコシダーして側近を吹っ飛ばした後、大急ぎで森を駆け抜けていく。

そして、魔のサソリとやらの死体と、その近くに空いた大穴を見つけ回り道して裾まで駆け下りようとしたところで、晴天だったはずの空から落雷が付近へ炸裂。

ドラゴンボーンとしての自分に導かれるままに、全速力で駆け抜けてみれば……山の麓部分にぽっかりと開いた穴から、レオナ姫を横抱きにしているダイが出てきた。

立派な姿になって、とほろりとしていたらダイが自分の存在に気付き、レオナ姫が猛毒に犯されてしまった事を必死に訴えてくる。

ソレはいかんと万が一に備えて持ってきていたバッグを開き、中から取り出したるは虎の子の毒消しと、体力回復＋スタミナ回復の効果を持つ自家製ポーション。

まずは毒消しをレオナ姫へゆっくりと飲ませた後、呼吸が安定したのを確認してから体力回復＋スタミナ回復のポーションを飲ませる。

この毒消しは、タムリエルのありとあらゆる毒を打ち消せる代わりに……自前で調合不可能な事から、数に限りがある代物だがダイの大事なお友達を救う為には惜しくない。

最初は予断を許さない容態だったレオナ姫だったが、ダイが行ってくれたショート

カットによって合流できたおかげで、何とか治療は間に合ったようだ。
むしろ体力回復＋スタミナ回復が効きすぎたのか、元気溌剌と言った具合である。どうやら奮発して投与した、アルドゥインとの決戦用に作ったポーションでは効力が強すぎたらしい。

意識を取り戻したレオナ姫は、自分へ深々と頭を下げて命を助けてくれたお礼を述べてくるが、気にしないでほしいという気持ちを込めて姫のサラサラとした髪の毛をすくようにその頭を撫でる。
そして、投与した薬の効果がすさまじい事を興奮交じりに感想を述べ、原材料を聞いてきたので……。
焼け焦げたスキーヴァーの皮と、サーベルキャットの目をカバンから取り出して誇らしげに見せたところ、レオナ姫は姫がしちゃいけないレベルでげんなりとした表情を浮かべながら、吐き気を堪えるように口元へ手を当てていた。
何だかこう、申し訳ない。

その後、ダイからバロンが悪者だと教えてもらい、急いでブラス氏達と合流しようと3人で森の中を駆け抜けたのだが。

静かだった浜辺は今や、戦場のような様相を呈しており。ブラス氏が杖に捕まりながらも四つ足の機械と対峙していた。

ドワーフの作ったゴーレム達ともまた違う意匠だな、と思い見ていたらブラス氏曰くかつて魔王が勇者を打倒するために作成した殺戮マシン。その名もキラーマシンというらしい。

キラーマシンの足元に老人が黒焦げになり痙攣しつつ転がっているのが見つかったので、気になってブラス氏へ視線を向けたところアレはテムジンだと教えられた。

どうやら、キラーマシンに乗ってるらしいバロンは、その破壊力に魅入られて半ば暴走状態らしい。

ブラス氏とレオナ姫に退避をお願いし、自分でキラーマシンを粉砕しようとしたらダイも手伝うと鼻息荒く参戦してきたので、無茶をしないよう視線で伝えつつ了承するし。

特に危機に陥る事なく、キラーマシンの足を４本とも自分が黒檀の片手斧で粉砕したところで、レオナ姫をだまし害そうとした怒りに燃えるダイが発動させたベギラマがキラーマシンを包み込み。

度重なる損傷によって生まれた装甲の亀裂から入り込んだ熱によって、操縦していた

バロンが見事にこんがりと焼かれたところで戦闘は終了した。

その後は、少しごたつきながらも今回の騒動の原因となった主犯であるテムジンとバロン、他側近らがパプニカの役人によって連行されていき。

ダイとレオナ姫が友誼を結んだところで、一旦の幕引きとなったのであった。

デルムリン島　　どんより日

その日は朝から、不吉で重苦しい空気が島全体を包み込んでいた。

嫌な予感がしたので、ダイには今日の訓練と勉強はお休みだと伝えた後、ブラス氏の様子を見に行ったところ……。

何かを必死に堪えているブラス氏に近づくなと叫ばれた、何でも魔王が復活したせいで邪悪な意思に蝕まれているらしい。

だがしかし、自分の恩人でもありダイの大事な家族であるブラス氏を置いていくわけにもいかないと、抱き抱えようとしたところでダイも帰って来た。

ブラス氏は、何かを必死に堪えながらも目に涙を浮かべ、このままではお前達を害し、

殺してしまうかもしれないと呟き。

急いで支度をして、この島を出るのだと自分とダイへ訴えかけてくる。

時間が無い以上、必要最低限の荷物だけをまとめカバンを担ぎ、沈んだ表情のダイの手を引いてブラス氏が用意していたらしい小舟がある浜辺へ案内される。

島のモンスター達が大挙して押し寄せてくるのを見つけたブラス氏が、ダイと自分に行ってほしいと懇願するが……ダイは嫌だと叫ぶ。

じいちゃんや皆を置いて、母ちゃんと俺だけで逃げるなんて出来ないと。そんなの勇者のする事じゃないと必死の形相でブラス氏へ訴えかける。

何とかしてあげたいし、何とかしたい。しかし自分にはどうすれば良いのか浮かばない。野生動物を鎮静化させるシャウトが効果を持つかもしれないが、アレは短時間しか効果がないのだ。

どうしたものか、と思い悩んでる間に大量のモンスター達が自分達へ殺到してき、最早成す術なしかと思っていたその時。

ダイの叫びを一人の青年の声が認め、声の咆哮へ振り向いてみれば二人の人物が小舟の上に居た。

一人は眼鏡をかけ、髪の毛をカールさせた細身の男性。しかし中々な実力を内包していそうな人物だ。

もう一人の小舟を漕いでいた少年の方は、衣服の様子から戦士には見えないからきっと魔法使いなのだろう、しかしそれなりに鍛えてそうな顔つきをしている。
だが気のせいか、その視線はローブを内側から押し上げてる自分の胸元へ釘付けになってる気がする。

そんな事を考えてる間に、小舟から飛び移って来た眼鏡の男性は島から出る必要はないと告げると、鞘に入ったままの剣で地面を擦りながら風のような速さで走り始め。
自分達へ押し寄せていたモンスター達を軽々と弾き飛ばすと、そのまま走り抜けていき……何だったのだろう、と茫然としていたら違う方角から戻って来た。
そして、呪文を唱えると激しい鳴動と共に男性が刻んだ痕が光り始め、島を包んでいた曇天の空すらも吹き飛ばした。
思わず茫然としていたが、ブラス氏の様子を見ると先ほどまで彼を苦しませていた邪悪な意思とやらは全くないらしく。
襲い掛かろうとして来ていたモンスター達の群れも、敵意に満ちた視線からいつも通りののんびりとした目付きへと戻っていく。

ソレは、まさに奇跡というべき光景であった。

（ＴＳ）ドヴァキンさんの修行日誌

デルムリン島　修行生活二日目

昨日は色々とバタバタしていたため書けなかったが、改めて日記執筆を再開する事とする。

そんなワケで、今はブラス氏とダイに加え、島の魔物達を悪意から救ってくれたアバン氏と彼の弟子であるポップ君の為に朝食の支度中だ。

メニューは、昨晩の残りであるビーフシチューを温め直したモノと、焼き立てのガーリックブレッド、島に自生している野草で拵えたサラダだ。

材料は際限なしに突っ込んでいたっぽいおかげで、リュックの中から出し放題だから気が楽なものである。

赤のラグナルをスローテンポ気味に鼻歌で唄いながら、鍋をおたまでかき回していると扉が開いたので、顔をそちらへ向けてみればダイ達が早朝の修行から戻って来たようだ。

ケロっとした表情のアバン氏と比べ、ダイとポップ君は汗だくで息も絶え絶えだ、

中々に扱かれてるらしい。
アバン氏は二人に軽く汗を流す事を勧めると、自分に頭を下げて謝ってくる。食事の世話をさせている事が心苦しいらしい。
気配りの出来る御仁なのだな、などと思い軽く笑みを浮かべながら、ジェスチャーで配膳をお願いすれば快く引き受けてくれた。
そうやってテーブルにシチューの入った深皿と、小分けにされたサラダの乗ったお皿。テーブルの中央に山積みされたガーリックブレッドが用意された頃。
腹ペコを隠そうとしていない少年二人と、ブラス氏が入って来たので朝食を皆で摂る事とする。

昨日も食事に舌鼓を打ってくれたアバン氏とポップ君であったが、今日も美味しそうに食べてくれて嬉しい限りである。
ダイとブラス氏も、今日のご飯も美味しいと言ってくれて何よりだ。
時折、ポップ君の皿に自分の分のサラダをこっそり移そうとしているダイのほっぺを引っ張ってメッしつつ、皆綺麗に平らげてくれたので3人にお弁当を渡して修行へ出るのをお見送りした後。
洗い物を手早く済ませ、晩御飯の仕込みを終えるとブラス氏に一声かけて秘密の鍛冶

場へ向かう。

作るモノは決まっている。

初日にダイが折ってしまった、アバン氏の剣の代品と……ダイ達の装備だ。

えっちらおっちらと山を登り、顔なじみの魔物達に手を上げて挨拶をしつつ到着したのは溶岩を引いて作った秘密の鍛冶場。

まず作るのは、アバン氏の剣だ。

見たところ、重装備で重い武器を振り回すタイプでもなさそうなので、ここは碧水晶の剣を作って贈る事にする。

奮発しすぎかもしれないが……大事な息子の家庭教師代として差し出すのだ、手抜きはしない。

研磨されたクジャク石、研磨された月長石、そして革紐をリュックから取り出し体に染み付いた作業工程が導くままに……。

丹念に心を込めて、透き通るような碧色の刃を持つ一本の剣を作り上げ。

更に、その剣を研磨台へ持っていき、研磨されたクジャク石を更に使用して作った剣を磨き研ぎ澄ませればあら不思議、レジェンダリ等級の碧水晶の剣の完成である。

汗で体に張り付いたシャツの不快感も吹き飛ぶぐらいの、満足な出来である。空を見上げてみればまだ夕方まで時間もあるので、折角だし細工を拵えた鞘も用意する。

そうやって作り上げた剣を背負い家へ戻ろうとすれば、森の中でポップ君とばったり遭遇。

何やらしどろもどろになりつつ、弁解をしているが。どうも彼は魔法使いが故に、ダイが受けていた訓練は受けてないらしい。

しかし、どこか後ろめたそうな表情もしてるので、ちょいちょいと手招きして屈ませた後、彼の頭を優しく撫でて上げる事にする。

そして、頑張れと言う気持ちを込めて方を優しく叩き微笑みかけてみれば、何やら気合の入った顔をして明日から俺も参加するぞー！と叫んで走り出す。

元気になってくれたようで何よりだ、自分の胸に視線が集中していたが年ごろの少年だしょうがないしょうがない。

そう思いながら、未だ汗で肌に張り付いているシャツに覆われた自らの胸を持ち上げてふと気づく。

自分の汗で、シャツが透けて乳首とか見えそうになってた。いかん失敗失敗。

この日の晩御飯は、奮発してエルスウェーアフォンデュを振る舞う事にした。

下ごしらえ済みの食材を、特製のチーズフォンデュに漬ける事で味わってもらおうと

いう寸法である。
そしてその目論見は、疲労困憊だったダイや、自分の胸元へ視線を吸い寄せられては気まずそうに目を逸らしていたポップ君ががっつく勢いで美味いと言ってくれたおかげで成功を収める事が出来た。
のだが……。
一口食べたブラス氏とアバン氏が、真顔になって思いきり焦ったのは内緒である。
魔力が体から溢れそうなぐらいだと言われ、材料を聞かれたのでムーンシュガーを取り出して見せたところ、二人の真顔は硬直した。
どうやら、月の魔力を吸い上げて作られる、エルダースクロール世界の調味料であるコレはこの世界では、精霊が作り出した食材とかそんな勢いのブツらしい。
入手経路を聞かれたので、笑って誤魔化しておいた。

デルムリン島　修行生活三日目

今日はとても危険な修行をするらしく、その承諾をアバン氏に頭を下げて求められた。

あの飄々としたアバン氏が言うくらいだからよほどのモノだと思うが、まぁこの人ならば悪い事は無いだろうと思い笑顔で頷きつつ。

昨日作った、レジェンダリ等級碧水晶の剣を差し出した。

そうしたら、アバン氏が真顔になった。これをどこでと聞かれたので、ジェスチャーで自分が作り出した事を伝えた。

その結果、ものすごい苦虫を噛み潰したかの様な顔で、決してその技術を人に見せびらかさないで下さいと懇願された。解せぬ。

表情から察するに、勇者として活動してる間に人の醜い所もいくつか見てきているのだろう、故にこそ自分やダイを案じてそういってくれたのだろう。

ならば、自分がする事は頷いてその気持ちに答える事である。

自分の返事にアバン氏は真顔を解くと、何時もの飄々とした顔になりつつ……伝説の武器に匹敵するどころか、そのものかもしれない業物ですが良いのですか?とまで聞いてきたので。

ジェスチャーで、貴方の為に作ったのだから受け取ってほしいと伝える。うまい具合に伝えられた自信はないが、なんとか伝わったらしい。

そうして、今日も皆を送り出し家事と鍛冶に精を出していたところ。激しい地震によ

り作業を中断させられてしまう。
胸騒ぎを感じ、揺れが幾度も襲い掛かる中アバン氏達が修行をしているという洞窟へ向かって走るが、運の悪い事に鍛冶場は丁度反対側に会った事もあり……。
途中で揺れが収まり、自分が駆け付けたその場所には。打ちひしがれた様子で泣きじゃくるダイ達がそこにいた。

デルムリン島　修行生活後１日目

ダイから聞いた話によると、魔王ハドラーとやらが襲撃してきた事が原因らしい。
アバン氏は弟子であるダイとポップ、そしてダイの保護者であるブラス氏を守るべく奮闘を重ねたモノの、碧水晶の剣による一撃は確かにハドラーを追い詰めたが……。
それ以上にハドラーが強くなっていた事で不覚を取り、起死回生の道連れ魔法メガンテで対抗。しかしハドラーは首の皮一枚残す程度であるが何とか生き残ってしまい。
そこでダイ達に襲い掛かろうとしたところを、額の紋章を覚醒させたダイによって見事に迎撃されて帰ったらしい。

と言う事だけど、話の流れは大体合っているかと。目の前で包帯だらけのアバン氏に問いかけてみれば、軽い調子で笑われながらその通りだと言われた。

気になったことがあったので、ダイとポップ君をブラス氏に任せ、自分は修行場周辺を探していたのだが……ものの見事に虫の息なアバン氏を発見。

急いでポーションをぶっかけて治療をしたところ無事生還を果たしたので、事情聴取をしているところである。ジェスチャーで。

なれば、皆に教えようとばかりにアバン氏の腕を引いて行こうとしたら待ったがかけられた。

なんでも、非常に気が引けるし後ろめたいが……ハドラーの裏にいる大魔王への情報戦として、ここで死んだ事にしておいた方がきっと未来の為になるとの事である。

個人的には、ダイとポップ君が打ちひしがれているから元気な顔を見せてやってほしいものだが……きりっとした真顔で言うものだから、こちらとしても都合が悪い。

しばし互いに見つめ合う事数分、結局折れたのは自分の方であった。

だがしかし、なれば徹底的にやってもらおうと思ったので。アバン氏の目の前でリュックから黒檀の鎧一式を取り出して手渡す。

拾ったままリュックの中で死蔵してた一式だが、この鎧一式は顔も隠れるセットなの

で顔を隠して動くには都合がよさそうだと思ったのだ。
押し問答になりかけたが、無理やり鎧一式と黒檀の剣、それにポーションを幾つか押し付ける形で決着する。
鎧のサイズ調整程度なら、ある程度は融通が利くので設備もほとんどいらないから楽だったのもあるが。
碧水晶の剣は、ダイがアバン氏の形見だと大事そうに抱えていた故渡せなかったが、アバン氏曰く。むしろダイ君にあげちゃいます、と軽い一言で決着だ。
ジェスチャーで家庭教師代も兼ねていた事を伝えたところ、気まずそうに笑ってごまかされた。
この男、割とモノに執着しないんだな、と言う事を今更理解した瞬間であった。

（TS）ドヴァキンさんの鍛造日誌

ロモス王国　初日

ダイ達と共にデルムリン島を出立した自分達は、森の中で迷ったり子供を助けたり。まぁなんやかんやの末に、森の中でエンカウントした獣王クロコダインと激闘を繰り広げたりしたわけなのだが。

新たな仲間、マァムを加えてようやくロモス王国に到着。しかし残念ながら門前払い。

自分を見て驚いていたから、あの兵士は多分ゴメちゃん＆自分誘拐騒動の後に採用された兵士のようだな。

というわけで宿を取ろうと、そこそこ大き目の良さげな宿屋へ入ってみれば勇者がもう一組いるらしいと店主が言い出し。

目を輝かせたダイが駆け出し、ものすごい勢いで扉を叩き始めた。さすがに失礼だからやめなさいと止めようとするが、それより早く内側から扉が開く。

なんとそこに居たのは、ずるぽん一行であった。
ダイが一瞬で臨戦態勢になるが、それを後ろから抱き締めて押しとどめておく。
何か視界の隅でポップが羨ましそうにしてたけど、気のせいか。
自分を見てどこかバツが悪そうにしてるずるぽん一行、口では今もこずるく稼いでる風な事を言っているが。
装備や傷痕は隠せていない、何の彼のいって彼らは彼らで頑張っているようだ。
なんだか嬉しくなったので、ダイを宥めた後頑張ってるずるぽんの頭を撫でてやる。
ついでに、ガタが来てそうな彼らの装備も手早く整備してあげるとしよう、十分な設備が無くても手持ちの道具があればそんなに手間もかからず高品質に仕上げられるだろう。

ロモス王国　二日目

結局彼らの装備を整えて一夜が終わってしまった、だが喜んでくれたし良いだろう。
ダイが、母ちゃんが丹精込めた装備を売ったりするなよ?とジト目で釘を差してるが、その心配はない、きっと。

そんな具合に和やかに過ごしていたのだが、遥か彼方から響いた雄叫びと共に、地鳴りが町に近付いてくるのを感じた。

思わず窓から外を見れば、多種多様な魔物達が街へとなだれ込み、街を襲い始めていた。

そして、窓から見える上空には大きな鳥の魔物に肩を掴まれていたクロコダインが号令を出している。

ソレを見たダイが、急いで装備を整え……パプニカのナイフを腰に差し、碧水晶の剣と手荷物を持って一心不乱に駆け出して行ったので慌てて追いかける。

ポップも何か迷っていた様子だけど、マァムに激励されたのか一緒に走ってきてくれた。皆良い子だなぁ。

ずるぽん達も最初は怖気づいていたけども、全員が顔を引き締めると住人を襲う魔物達との戦闘を開始している。

やっぱり根っからの悪人じゃないよな、この子達は。

その後のロモス城でのクロコダインとの戦いは激戦、としか言いようがなかったけども何とか、ほんと何とか勝てた。

簡単な流れを書くならば……。

ブラスさんが人質にされた時はどうしたものかと思ったけども、ダイと自分が注意を

引き付けてる間にマァムの援護を受けつつポップが機転を利かせてマホカトール（小）を起動。

何とか正気を取り戻したブラスさんのおかげで、枷が無くなったダイが手に持った碧水晶の剣を右手に持ち、左手でパプニカのナイフを逆手に構えてクロコダインと切り結び……。

ロモス城の広間に飾られてたらしい、黒檀の両手斧を持つクロコダインと一進一退の攻防を繰り広げた末に。

ブラスさんを人質に取られた事、ポップがブラスさんを助けるために取った行動の際に重傷を負わされた事に激怒したダイの額に紋章が輝いた次の瞬間。

右手に持っていた碧水晶の剣を逆手に構え、アバンさんの必殺技とも言えるアバンストラッシュをクロコダインへ叩き込んだ事で、決着を着けた。

最初は憎悪やエゴに凝り固まっていたクロコダインの表情だったけども、ダイの一撃を受けて城の外へと落ちていったその顔には晴れやかな感情が浮かんでいた。

やっぱりうちの子は強いな！

……あ、クロコダイン……黒檀の両手斧持ち逃げして落ちていってる。

ロモス王国　二日目　夜

激闘を終え、救国の英雄としてダイ達がロモスの人達にお披露目された日の夜。
自分はロモス城にある鍛冶場を借り、ＭＯＤ的なもののおかげでカバンに入ってた携帯符呪機を使ってダイの防具と、ポップとマァムの為の装備を拵える事にした。
ポップは今回、ブラスさんを助ける為にアバン先生との思い出の品でもある杖を砕く羽目になっちゃったし、マァムの魔弾銃は凄い便利なんだけど弾の再装填が大変そう。
だがしかし、魔法力を増幅させる杖なんてものはさすがに作れない、なのでポップにはマナ総量増強のエンチャントを付けた指輪を、大きい魂石を使って作成。
ダイの防具は、ドラゴンの鱗を使った軽装鎧一式を作成
ポップも同じようにしようと思ったけども、軽いと言っても結構重量もあるから間をとって水銀のインゴットとかを駆使してエルフの軽装鎧を作成。
とどめとばかりに、結構力持ちだったマァムにはとりあえず様子見として、ドワーフの金属インゴットを使った重装の鎧を作成し……。
ドーンガードでお世話になった、クロスボウを丹念に拵えるのだ。

翌朝、やり過ぎだとダイに怒られた。解せぬ。